

### Ⅲ. 父、高安右人の思い出

鹿児島大学教授 高 安 晃

(昭和40年11月29日受付)

金大眼科創設満80年 (記念講演)

昭和39年10月25日 於 十全講堂

本日、金沢大学医学眼科学教室の創立80周年記念式が行なわれましたことは、眼科教室のみならず、金沢大学の歴史の上に、輝かしい一ページを飾るものでありまして、誠に御目出度い次第でございます。心からお祝い申し上げます。

この記念すべき日に、私まで御招待頂きまして、何か父の思い出について話をするようにと、倉知先生から御依頼がありましたのですが、亡くなった父の光栄でもありますし、またこういう機会を与えて頂きました私にとりましても光栄と存じまして、はせ参じた次第であります。

私の父は、佐賀県出身でありまして、佐賀県の小城郡の西多久村の武岡家の4男として生まれたのであります。万延元年7月19日生まれであります。亡くなったので79歳でありますから、今もし生きておると105歳にあたります。父は、明治20年1月31日に東京帝国医科大学を卒業致しました。そして、明治21年3月31日に第四高等学校教諭として金沢に赴任しました。明治34年6月12日にドイツ留学から帰国しましたが、その頃はまだ私は生まれておりません。明治36年7月27日に、角膜の老人性変性についての論文で医学博士の学位を受けております。当時の文部大臣は、男爵児玉源太郎ということが記録に出ております。それから明治37年の12月には、丁度日露戦争が起り、その頃軍医として勤務しました。そして陸軍の予備病院で戦傷者の治療をやっていたようです。戦争が終了したのが38年でございますが、その時は確か私はまだ3歳の頃でありました。戦勝の提灯行列があつたことだけを確かに覚えております。父は金沢医専、金沢医大教授をつとめ、一方附属病院の眼科部長としてつとめておりました。また、医専の校長をも永くつとめておりました。こちらの大学におりました頃は住宅が病院の裏門に近いので通勤しておりました。公式の時は病院の人力車で通っていました。子供ながら時々それに便乗して楽しかったことも思い出されます。大正13年4

月9日に、学長を退官致しました。そして自宅でしばらく開業しておりました。その頃は、勿論自由診療でありましたが、ほかの開業医に迷惑をかけないため診察治療費を高くして患者を制限したようであります。その当時味噌蔵町の電車通りに病院を建てました。住宅は現在は人手に渡つておりますが、下百々女木はの宝円寺の傍に家があつてその中の応接室を診察間にして、そこに視力表など色々設備して、こじんまりした開業でした。その後味噌蔵町に出来た病院は診療所ですが、外来手術室、病室もありました。身体は非常に丈夫でありましたので自宅から電車を通つておりました。私の学生時代は熊本でありましたが、夏休みを利用して手伝つて手伝つてくれないかということで、その頃は父が一人でやつていたこともあるもんですから、学生時代に手伝つたことがあります。

40年間永住していた金沢を去つて別府に参りました。丁度別府に参りましてから少し胃腸をこわしまして、どうも腹がはつて困ると非常に痛かつたらしいんですが、始めてその時私の母親に、お前が妊娠して非常に腹が痛い苦痛を始めて自分で味わつて、さぞかし苦しかつたらうといつたことがあります。このように我慢していたのが却つて、その時やはり直腸癌であつたんですが、或いは大分前から少しどうかあつたんじゃないかと思ひます。自分の病気に対する少しの痛みとか、少しの苦痛を他人に知らせなかつたようでせ。鹿児島に参りましたこともありますが、鹿児島で病気が悪くなりましたので、別府の温研に入院したのであります。直腸癌も手術が不可能な程度になりまして、遂に昭和13年11月20日、79歳で亡くなったのであります。生前私の子供の頃におりました小立野の家は、病院のすぐ裏にあつて、その家の横の馬坂の下に不動明神の滝水が流れております。それが丁被家の庭から流れて出たような形になつております。そこへ、よく眼の悪い患者が信じてその水で眼を洗つたりして、眼病が早く癒るように祈つていたのを、私が子供心によく

遊びに行つてそれを見たものです。何か一つの繋がりがあつたように思います。11月20日に亡くなりまして、昭和13年11月24日午後8時9分に、遺骨が再び4年ぶりに金沢に帰りまして、大学の記念館の会場で、11月27日に神式で葬儀がございました。皆様の多数の方々の御参拝がございました。感慨無量でありました。

そういうことで、79歳で一生を終えたわけでありましたが、私は父の発表した文献を集めて見ました。明治41年の第12回日眼総会に、「稀有なる網膜中心血管の変化」、それが先程、倉知教授がお話になりました、所謂高安氏病、脈なし病であります。その他に特発性の角膜脂肪変性、これは、GraefeのArchivに“Über eine Primär Fett-Degeneration der Kornea”として発表してございます。ここにこの別刷がでございます。もう一つのArcus senilisの別刷があつたのですが、外国の方で是非送つてくれというので、それを送りましてので手許にはありません。

父は金沢に永くいまして、金沢の山や川を非常に愛しておりました。特殊の趣味として玉つきをやつておりましたが仲々上手だつたようです。謡も好きで加賀宝生を先生について熱心にやつておりました。漢詩も少し嗜んでいたようであります。お酒は晩酌をやつていました。宴会などで少し飲むと面白い余興もやつたようであります。これをとうとう残念なことに私は実際見たことはありません。たしか足の指に盃をかぶせ

はしを使つてカッポレをおどらせたそうです。母親は非常に厳格でしたが、父親はそう怒つたりすることはなかつたようです。

非常にやさしい父で時々面白い話をきかしてくれました。金沢に40年おりました間、金沢の医専時代から大学になつて、その間色々の眼科の先生方や他の方と交友しておりましたのですが、当時は、下平先生(外科)、山崎先生(内科)、松原先生(精神科)、宮田先生(耳鼻科)、須藤憲三先生(医化学)がおられたことを覚えております。

そういつた父が永年に亘りこの大学にお世話になりまして、父が退官の後は山田邦彦教授、中島教授がこられたのであります。

今日は、倉知先生始め教室の皆様方が網膜の新陳代謝、眼組織の新陳代謝、また一方の研究についての立派な業績を御報告になりまして、益々金沢大学眼科教室が発展しつつありますことは、誠におめでたい次第でございます。基だとりとめない話をこれで終ります。

終りに際して、このような機会を与えて頂きました倉知先生始め教室の皆様また眼科医会の方々に厚くお礼申し上げます。なお私としては父の墓に参りまして本日のこの盛大な式典のことを告げたいと存じます。さぞかし父も喜ぶことと存じます。どうも色々有難うございました。